

[参考資料]

イム像 [立像・坐像(座像)・半跏像]

- 1 阿弥陀如来 阿弥陀の尊号。如来とは、仏「釈尊」の別称で、代表的なものは、
釈迦(しゃか)如来。薬師(やくし)如来。阿弥陀(あみだ)如来。盧舍那(るしゃな)如来。大日(だいにち)如来。
阿弥陀三尊 阿弥陀仏とその左右に脇侍(きょうじ)する観世音・勢至の二菩薩
阿弥陀二十五菩薩 二十五菩薩に同じ
阿弥陀：西方にある極楽世界を主宰する仏陀の名。信者は死後その世界に生まれかえる。東アジアの浄土教諸派(我が国では浄土宗・真宗など)の本尊。弥陀。
二十五菩薩：念仏の衆生を擁護する二十五菩薩。観音・勢至・薬王・薬上・普賢・法自在王・獅子吼・陀羅尼・虚空蔵・宝蔵・徳蔵・金蔵・金剛蔵・山海慧・光明王・華嚴王・衆宝王・月光王・日照王・三昧王・定自在王・大自在王・白象王・大威徳王・無辺身の25菩薩のこと。
菩薩：成道以前の釈迦牟尼仏及び前世のそれをさしている。仏陀となることを理想として修行するもの。大乘仏教における信仰の対象で、観世音・文殊・普賢・地藏をいう。
 - ・観世音菩薩：観世音の尊称
 - ・観世音：菩薩のひとつ。大慈大悲で衆生を救度するを本願とし、勢至菩薩と共に阿弥陀如来の脇侍。多くの形像があるが、その本は正観音(聖観音)でその住居は、日本では那智山という。観音・光世音・大悲聖者・観自在・観世自在ともいう。
 - ・勢至菩薩：阿弥陀仏の右脇士で、智慧を表す菩薩。即ち智慧光を以てあまねく一切を照らし、三途(三悪道)を離れ、無上力を得させるといふ。宝冠中に宝瓶をのせ、左手には開合蓮華を執る。大勢至菩薩・得大勢ともいう。
 - ・文殊菩薩：文殊師利の略。妙徳・妙吉祥などと訳す。大乘般若の説教と深い関係があり、一般には普賢と共に、釈尊の左に侍して智慧を司る菩薩。獅子に乗るを常とし、日本では民間に子供に智慧を与えると信じられる。法王子・吉祥金剛ともいう。
 - ・普賢菩薩：仏の理・定・行の徳を司り、文殊と共に釈尊(釈迦)の脇士で、白象に乗って仏の右側にいる。一切菩薩の上首として、常に仏の教化・済度を助けるといふ。
 - ・弥勒菩薩：弥勒の尊称。現在、兜率天(とそつてん)に住し、釈尊滅死五十六億七千万年の後この世に下降して、釈尊の救いに洩れた衆生のために、竜華三会(りゅうげさんね)の説法をするという未来仏。慈氏菩薩・弥勒慈尊・弥勒仏ともいう。
- 2 地藏尊：地藏菩薩の尊称
 - ・地藏：地藏菩薩の略
 - ・地藏菩薩：釈尊の付託を受け、その入滅後、弥勒仏の出世するまでの間、無仏の世界に住して六道の衆生を化導するという菩薩。

像容は比丘形で左手に宝珠（ほうしゅ）、右手に錫杖（しゃくじょう）を持つ形が一般に流布する。子安地藏・六地藏・延命地藏・勝軍地藏・子育て地藏などがある。

- ・六道：一切の衆生が善悪の業によって、おもむき住む六つの迷界。即ち地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上をいう。六観音・六地藏・六道銭・六道の辻はこれに由来する。
- ・六道輪廻：六道の間を、生まれ変わり、死に変わりして、迷いの生をつづけること。
- ・六道地藏：地藏菩薩（地藏尊）には、地獄地藏・餓鬼地藏・畜生地蔵・修羅地藏・人道地藏・天道地藏と六つの地藏、即ち六道地藏（六地藏）があり、その持物によって地藏の名称が異なる。

六道地藏の持物

①地獄	（大定智悲地藏）	—————	左手宝珠、右手錫杖
②餓鬼	（大徳清浄地藏）	—————	左手宝珠、右手与願印
③畜生	（大光明地藏）	—————	左手宝珠、右手如意
④修羅	（大清浄無垢地藏）	—————	左手宝珠、右手梵篋
⑤人道	（大清浄地藏）	—————	左手宝珠、右手施無畏
⑥天道	（大堅固地藏）	—————	左手宝珠、右手經冊

宝珠：（ほうしゅ）尖頭で、頭及び左右の側から、火焰の燃え上がっているさまの玉。如意宝珠。

錫杖：（しゃくじょう）僧侶・修業者の持つ杖。地に引くときに、錫々の音を立てるからいう。

与願印：（よがんいん）

如意：（にょい）思うようになること。思いのまま。説法・法会に講師・導師の所持する具。主として金属製で、爪枝・まごの手の変形したもの。長さ30～40cm位。

梵篋：（ぼんきょう）

施無畏：（せむい）持物なし。

經冊：（きょうさく）

3 観世音・観音像 【丑年にご開帳：平成9年4月10日（1997）】

- ・〔誓願行〕：
- ・聖（正）観音：
- ・十一面千手観音：
- ・十一面観音：
- ・千手観音：
- ・如意輪観音
- ・子易（子安）観音
- ・馬頭観音
- ・百番観音



- ・六観音：六道の衆生を済度（さいど）する六種の観世音。
- ・七観音：衆生化益のため、身を七種に変幻した観音。

	六観音（台密）	・	六観音（台密）	・	七観音
聖（正）観音：	_____	*		*	*
十一面観音：	_____	*		*	*
千手観音：	_____	*		*	*
如意輪観音	_____	*		*	*
馬頭観音	_____	*		*	*
不空羂索（ふくうけんさく）	—	*			*
准提（じゅんてい）	_____			*	
准胝（じゅんてい）	_____				*

（注） 済度（さいど）：仏・菩薩が衆生の苦海にあるのを、済（すく）い出して常楽彼岸、即ち涅槃（ねはん）に度（わた）らせること。

法を説いて世の迷闇を解き、人の煩惱を除いて悟りを開かすこと。

（注） 涅槃（ねはん）：吹き消すこと、消滅の意。煩惱を滅却して、絶対自由となった状態。これを、虚無の状態と見る説と、永遠の至福とみる説がある。

- ・〔誓願行〕：誓願とは、一般的には誓い願うこと、即ち誓いを立て、願（がん）を立てること。がんかけともいう。

仏教的には、菩薩が必ず成し遂げようと、願い定めた誓い。四弘誓願（しぐぜいがん）・薬師の十二願・弥陀の四十八願・釈迦の五百大願の類をいう。

誓願力とは、仏が因位において誓った本願の力をいう。

誓願行： 私たちは実に様々な願いを持っています。大きい願いもあれば、小さな願いもあり、願いそうもない願いもあれば、叶えば叶うで次々に湧いてくる願いもあります。まさに私たちは願いで生きているといえよう。しかし、その願いはたいたい欲望と同じなのではないでしょうか。欲の塊が私たちなのです。その欲は私利私欲に終始し、ちょうど獣が一日中自分の餌を探し回るようなものです。

欲だけでは、私たちも獣と変わりはないのです。その欲望を清らかな願いに変えていく方法が、誓いということなのです。ここでいう誓いとは、大いなる存在の前にぬかづいて誓うことです。大いなる存在とは、仏・菩薩様のことです。

端坐合掌して仏・菩薩様の前に自分の願いを叶えてください。そのために「正しく生きます」と御誓いするときのみ、仏・菩薩様は冥助の手を差し出されます。冥助（めいじょ）とは、見えない力、それとはわからない力のことです。この冥助の力が尊いのです。

仏・菩薩様の御前で願い誓うだけでは何也不会。その願い誓った

ことを叶える主体は私たちだからです。仏・菩薩様は手助けをして下さるだけです。

そこで行という行動が大切になってくるのです。これから願いと、誓いと、行いの三つが同時に動くときのみ、冥助の力がいただけます。

「念ずれば、花開く」という言葉があります。この誓・願・行が一つになった時のことばが「念」ということです。その時には、自ずと幸せの花が開くということです。叶わない願いなどありませんが、自分のできる行いと、誓いとを自分の心の内に聴いてみれば、自然と答えは出てきます。

元来、願いには大小の差はありません。

仏・菩薩様の御前で願い誓って行いぬくことは、すでに仏作仏行という尊い姿なのですから、もちろん、巡礼姿もその仏作仏行のひとつです。

・聖（正）観音（しょうかんのん）

観音様といいますが、この観音様のことです。最も根本的な観音様と言ってもよいかもしれません。この観音様で有名なのは、法隆寺夢殿の観音様で、聖徳太子がご自身と同じ背丈でこの観音様を作り、世の中のすべての人々の苦しみを、お救いくださいと誓われたという伝説があることから、この観音様を救世観音（ぐぜかんのん）様とも言います。この観音様は化仏（けぶつ）という小さな仏様の坐像か立像のある宝冠を被られているのが特徴とされています。

・十一面観音：（じゅういちめんかんのん）

頭の上の方に顔が十一あることから、このようにお呼びしています。

十一という数は、人間の欲望が11あり、それを取り除いて11の極楽に生まれるよう、お救いくださるという意味の現れです。

その11のそれぞれのお顔を拝見しますと、正面の3つの顔は慈しみ（いつくしみ）の表情、左の方の3つは怒り（いかり）の表情、右の方の1つは白い歯を出して怒っているような表情であり、後ろの1つは口を開けて大笑いしておられ、頭の頂上のお顔は、穏やかな普段の表情となっているのが多いようです。

また、この観音様は、左手に水瓶（宝瓶：ほうびょう）を持たれ、右手は手のひらを外に向けて垂れられた姿が一番多いようです。

・千手観音：（せんじゅかんのん）

背中の方からたくさんの手が出ている観音様のことをお呼びします。

そのそれぞれの手に眼があることから千手千眼観音様ということもあります。文字どおり千本の手が付いている像もありますが、それを略して左右に二十一本ずつ合計四十二本の手を付けている像もあります。

また、それぞれの手に色々な道具を持っておられますが、これは観音様のお慈悲の動きのあらわれであり、どのようなことにも対応して、その人を救うことができますという、この観音様の決意を表しています。

・十一面千手観音：（じゅういちめんせんじゅかんのん）

十一面観音様と千手観音様を合わせた、十一面千手観音様です。その名のように二人の観音様のお力を合わせた観音様です。

お顔やお手の数が多いからご利益がその分多いわけではありません。そう考えて

は、間違った観音様の解釈になってしまいます。

私たちは、普段の生活の中で怒ったり、笑ったり、困ってみたりと実に色々な表情をしています。手や足だって色々な動き、さまざまな物を掴んだりします。

菩薩様も同じように表情は豊かであり、手や足も自在に動くのです。そのような菩薩様の動きをどうにかして像に現せないかと、人々が考えだしたのが、多くの顔や手を一つの像に付けることだったのです。

多くの顔や手を付ければ付けるほど、観音様の表情や仕草が、私たちに伝わってくると考えたのです。ですから、実際顔や手がいっぱいある観音様がいらっしゃるわけではありません。

これを間違えますと、観音様の姿や動きに差別を付けることになってしまいます。

・馬頭観音：(ばとうかんのん)

普通観音様は、みなやさしい顔をしておられますが、この観音様はよく怖い顔をされています。そして、頭の正面に白い馬の頭をいただかれています。なぜ怖い顔をされているのでしょうか。実は、それは必死の形相なのです。怖い顔の代表として、お不動様がいらっしゃいます。私たちはその顔の表情を、恐くして悪いことをしないように見張っているのだ、怖い顔をして言うことを聞かない人を良い道に導こうとしているのだと考え思ってみたりもします。それも間違えでないかも知れません。

しかし、例えば自分の子供が今にも危ないような時、高い所から落ちそうな時、火傷をしそうな時、思わず危ないと叫ぶその顔は、穏やかな表情でしょうか。そうではないと思います。目をかっと見開いて大きな怒鳴るような声を、大きな口を開けて出しているに違いありません。その親の顔を見た瞬間、子供は親は怒っていると錯覚してしまうのです。

怒られると思うから、その瞬間に危ないことから離れて救われるのです。

怒り表情のように見える菩薩様も同じなのです。早く救ってあげなくてはという、切実な願いの表情が私たちから見れば、怒りの姿に見えるだけなのです。

・如意輪観音：(にょいりんかんのん)

人間を苦しみから救われることは勿論ですが、出世の功德も授けてくださる観音様です。一般には、一面六臂(いちめんろっぴ)の姿で現されます。

顔が一つに手が六本ということです。そして、右足を立て膝にして、その足で左の足の裏を踏み、立て膝にした右膝の上に、右肘を乗せ、物思いにふけるように右手を頬のところに当てた姿が多いようです。このような姿をされているのは、如意輪観音様だけであり、すぐにお名前がわかります。

・子易(子安)観音：(こやすかんのん)

妊婦の安産を守護するという神仏で、地藏・観音・鬼子母神などをいう。

- 4 薬師如来 薬師瑠璃光如来(薬師仏)の略〔寅年に御開帳 平成10年3月29日〕
薬師三尊 薬師如来に、脇士(脇侍)として日光菩薩(左)・月光菩薩(右)を配したものの総称。

また、薬師如来に属する十二神将もある。

薬師瑠璃光如来：東方浄瑠璃光世界の教主で、十二の大誓願を発して衆生の病苦を救い、無明の痼疾を癒すという如来。普通、薬壺（やっこ）を持つが、古くは施無畏・与願の印を結ぶ。

十二神将：薬師如来に属し、仏教の行者を守護する十二の夜叉大将。諸仏の化身とし、また刻（とき）を守る神とする。十二神明・十二神明王ともいう。

- ① 宮毘羅（くびら）：本地は弥勒で子神
- ② 伐折羅（ばさら）：本地は勢至で丑神
- ③ 迷企羅（めきら）：本地は彌陀で寅神
- ④ 安底羅（あんちら）：本地は観音で卯神
- ⑤ 頗伽羅（あじら）：本地は如意輪で辰神
- ⑥ 珊底羅（さんちら）：本地は虚空蔵で巳神
- ⑦ 因陀羅（いんだら）：本地は地藏で午神
- ⑧ 波夷羅（はいら）：本地は文殊で未神
- ⑨ 摩虎羅（まこら）：本地は大威徳で申神
- ⑩ 真達羅（しんだら）：本地は普賢で酉神
- ⑪ 招杜羅（しょうとら）：本地は大日で戌神
- ⑫ 毘羅（びから）：本地は釈迦で亥神

5 釈迦如来：釈迦牟尼の尊称

釈迦牟尼：仏教の開祖。世界四聖の一。略称で釈迦ともいう。

インドのヒマラヤ南麓の迦毘羅城主浄飯王の子で、母を摩耶（まや）、生老病死の四苦を救うため、29才のとき宮殿を遁れて苦学苦行し、35才仏陀加耶の菩提樹下に坐して正覚を得、法を説くこと45年、紀元前486年80才で入滅した。釈迦・釈迦牟尼仏ともいう。

釈迦三尊（釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩）又は（釈迦如来・薬王菩薩・薬上菩薩）

6 八臂弁才天（はっぴべんざいてん）・弁天曼陀羅諸尊・弁才天（弁財天）：

音楽・弁才・福智・延寿・除災・得勝を司る天。妙音天・美音天・大弁才功德天とも称する。二臂或いは八臂で、左手に弓・刀・斧・羂索（けんじやく）を、右手に箭・三鈷戟・独鈷杵（とつこしょ）・輪を持つものもあり琵琶を弾ずる。もと河川を神格化したもの。吉祥天と共にインドで最も尊崇された女神。後世、吉祥天と混同し、わが国では七福神のひとつとして信仰された。弁天ともいう。

7 宇賀神（うがじん）：穀物の神。転じて福の神とされ、弁財天と同一視され、天女形の像が多い。また、白蛇を神として祭ったもの。狐を神とする説もある。うかのかみ。

8 閻魔大王：閻魔王の敬称。閻魔天は閻魔王の別称。閻魔天（密教では、外金剛部二十天のひとつとし、免罪・安産の祈祷のとき、その本尊とする）

閻魔王は、インド神話で光明・正法の神、のち、人類最初の死者であることから、死の神として冥界を支配した王。

転じて仏教に入って地獄の主となり、十八の将官と八万の獄卒とを従えて、地獄に落ちる人間の生前の善悪を審判・懲罰するという。

經典により、地藏菩薩の化身といい、天部といい、異名も多い。その像は、古くは仏像に似て、左手に人頭をつけた旗を持ち、水牛に乗るが、のち、中国の服装で忿怒の相をなす。

閻羅・閻王・閻魔羅闍（えんまらじゃ）ともいう。

- 9 不動明王：五大明王・八大明王のひとつ。大日如来が一切の悪魔を降伏するために、忿怒の相を現したもの。色黒く眼を怒らし、両牙を咬み、右手に降魔の剣（宝剣：ほうけん）を持ち、左手に縛の索（羂索：けんじゃく）を持つ。常に火生三昧に住して、大火焰の中にあつて石上に坐し、八大童子などの使者を有する。不動尊・無動尊ともいう。

不動三尊： 不動明王と矜羯羅（こんがら）・制吒迦（せいたか）両童子を従える。

- 10 青面金剛像：（しょうめんこんごうぞう）

邪鬼を踏む三目六臂（さんもくろっぴ）像。左手にショケラ（合掌者）・日輪（太陽）・弓、右手に宝棒・戟（げき：三叉鋒の武器）・矢を持つ。

- 11 鬼子母神：王舎城の夜叉神の娘。千人（万人・五百人）の子を生んだが、他人の子を奪って食したので、仏は彼女の最愛の末子愛奴を隠し、これを戒めた。

求児・安産・育児などの祈願を叶えるという。

端麗にして宝衣・瓔珞（ようらく）をつけ、一児を懷にし、吉祥果（ざくろ）を持つ。歡喜母・訶梨帝母（かりていも）ともいう。

- 12 吉祥天：（きちじょうてん）

女神で、父は徳叉迦（とくさか）、母は鬼子母（きしぼ）。毘沙門天の妃。衆生に福德を与える。その像は容貌端麗で、天衣・宝冠を着け、手に如意珠を捧げる。功德天・吉祥天女ともいう。

- 13 大日如来： 宇宙と一体と考えられる汎神論的な密教の本尊。その光明が遍く照らすところから遍照または大日という。智を象徴する金剛界と、理を象徴する胎藏界との区別によって、二種の尊像がある。

遍照如来・毘盧遮那・遮那教主ともいう。

- 14 愛染明王： 愛染とは、貪愛染着の意で、むさぼり愛すること。煩惱（ぼんのう）。愛染明王の略。愛染法とは、密教で愛染明王を本尊として、息災・敬愛・得徳などを祈願する法で、愛染明王法ともいう。

愛染明王を本尊として構成された曼陀羅。

大日如来を本地とし、如来に愛染して如来に護られ、衆生に愛染して解脱させる明王。全身赤色、三目六臂（さんもくろっぴ）で、弓箭などを持つ。愛染法（愛染明王法）の本尊。後に変愛の祈誓、染め物業者や水商売

の女の信仰の対象となった。

(参考) 曼陀羅：諸尊の悟りの世界を表現したもの。一定の方式に基づいて、諸仏・菩薩及び神々を網羅して描いた図。

15 二大天王：大持国天王・大毘沙門天王

大持国天王：四天王のひとつ。須弥山の中腹東方に住し、東方世界を守護するという神。青色の身で、甲冑をつけた武神形。

その武器は、普通には刀。また宝珠を持つものもある。持国天。

大毘沙門天王：毘沙門とは、あまねく聞く意で、毘沙門天の略。

四天王のひとつ、十二天のひとつといわれる。黄色の身、忿怒（ふんぬ）の相の武神形で、甲冑をつけ、片手に宝塔を捧げ、片手に鉾、または宝棒を持つ。須弥山の中腹北方に住し、北方世界を守護するという神。

また、多門天とも訳し、四天王を並べていう場合には普通この名称を用いる。一名を俱毘羅という。毘沙門天。

四天王：四方鎮護の四神。須弥山の中腹にある四天王の主。

持国天（東方）・増長天（南方）・広目天（西方）・多聞天〔毘沙門天〕（北方）の称。上は帝釈天に仕え、下は八部衆を支配して、仏法帰依の衆生を守護するという。四大天王。

16 七面大明神：山梨県西南、富士川右岸、身延町西方にある山（海拔1982m）の山腹に、日朗の祀った日蓮宗の守護神七面大菩薩（七面大明神）の本院・拝殿があり、身延山久遠寺の鎮守。

17 三宝荒神：三種の宝。仏・法・僧の称。仏・法・僧の三宝を守護するという神。宝冠を戴き三面六臂、怒りの相を示す。火は清浄で不浄を掃うから、竈（かまど）の神として祭るという。

18 賓頭盧尊者（びんずるそんじゃ）：不動の意で仏弟子。十六羅漢の第一で、白頭・長眉の相を具え、涅槃に入らず、摩梨山に住んで衆生を救う。小乗においては上座とし、中国では唐まで食堂にその像を安置した。日本ではこれを撫でて病気の平癒を祈る。撫でばとけ・おびんずるさまともいう。

19 十二所権現：熊野権現の別称。本宮・新宮・那智山の三社にまつる十二の権現。即ち証誠殿（本地は阿弥陀）・結の宮（千手観音）・速玉の宮（薬師）・一万の宮（大聖不動）・十万の宮（普賢）・勧請十五所（釈迦牟尼）・飛行夜叉（不動）・小守の宮（聖観音）・児の宮（如意輪観音）・聖の宮（竜樹）・禅師の宮（地藏）・若王子（十一面観音）・十二伽藍

- 20 十二社：963年7月（一説には1370年）の制で、祈雨の神社、即ち竜穴・火雷・水主・木嶋・乙訓・平岡・恩智・広田・生田・長田・坐摩・垂水をいう。
- 21 十二上願：薬師如来が因位において、衆生教化のために立てた十二の誓願。
光明照耀・随意成弁・施无尽物・安立大乘・具戒清浄・諸根具足・除病安楽・転女成仏・安立正見・苦恼解脱・飽食安楽・美衣満足の願の総称。
十二大願。
- 22 十三仏：初七日から三十三回忌まで13回の追善供養仏事に配当した仏・菩薩、即ち不動（初七日）・釈迦（二七日）・文殊（三七日）・普賢（四七日）・地藏（五七日）・弥勒（六七日）・薬師（七七日）・観音（百カ日）・勢至（一周忌）・阿弥陀（三周忌）・阿閼（七周忌）・大日（十三回忌）・虚空蔵（三十三回忌）の称。
- 23 七福神：七人の福德の神。大黒天・蛭子（えびす）・毘沙門天・弁財天・福祿寿・寿老人・布袋（ぼてい）の七神。

◇土屋・大乘院

本尊阿弥陀立像

古来、朝日如来といい、これだけが戦災を免れました。





阿弥陀如来



文殊菩薩



普賢菩薩



弥勒菩薩



地藏菩薩



十一面觀世音菩薩



千手觀音菩薩



如意輪觀音



馬頭觀音菩薩



弁才天



閻魔王



不動明王



金剛夜叉



鬼子母神



大日如来



愛染明王

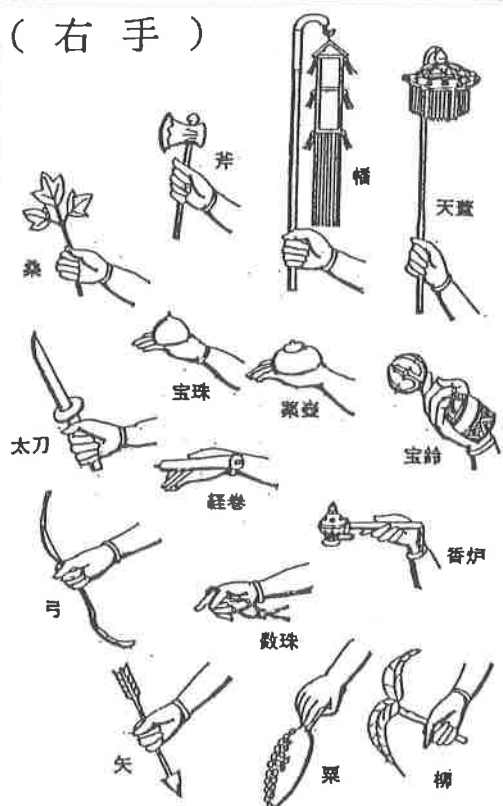


持国天



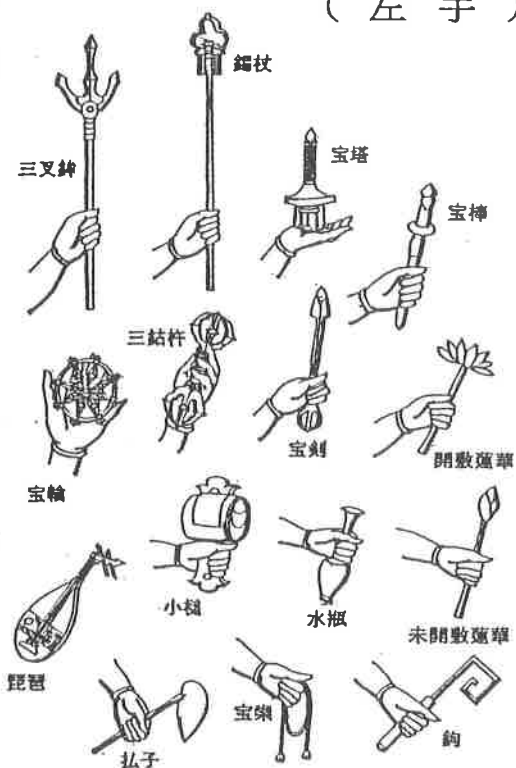
毘沙門天

(右手)



持物

(左手)



1. 持物 (じもつ)

寺院や路傍にある仏像は、ある決まりに従って造られています。

これを絵にまとめたものが図象です。図象には、仏の姿の特徴や持物 (じもつ) までこと細かに描かれており、仏像を刻む仏師は、これを忠実に再現しています。

持物 (じもつ) は、仏により、如来では薬師如来の薬壺 (やっこ) がよい例で、他に宝塔を持っていれば弥勒菩薩、剣と経巻を持っていれば文殊菩薩、剣と宝珠は虚空藏菩薩となっています。(上図)

2. 印相 (いんそう)

仏像の決まりの一つで、手の形や指の組み合わせで仏の誓願を表し、仏によって決められていて、石仏においても何の仏かを見分ける決め手となります。

特に如来たちは、宝冠を戴き宝飾品を身につける大日如来を別にして、全て同じ像容ですから、印相 (いんそう) で見分けることになります。

例えば、施無畏 (せむい) ・与願 (よがん) の印であれば釈迦如来、弥陀定印 (みだじょういん) を結んでいれば阿弥陀如来、手に薬壺 (やっこ) を載せていれば薬師如来、右手に降魔印 (ごうまいん) 左手に衣の裾を握れば阿しゅく如来、大日如来では智拳印 (ちけんいん) であれば金剛界であり、法界定印 (ほうかいじょういん) であれば胎藏界の大日如来となります。しかし、仏によって印相は決まっていますが、一様ではないことも知ってほしいもので

す。合掌する釈迦や阿弥陀如来もあります。このほかに、乗り物、種子 (しゅじ)、文字、干支 (十干十二支) 等々を注意しながら鑑賞します。

(下図)

印相



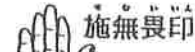
法界定印
(胎藏大日如来)



智拳印
(金剛界大日如来)



弥陀定印



施無畏印



降魔印 (触地印)



与願印



合掌印



馬口印